

# 退職によせて

## よく遊び、よく学べ…ゆとりは自分で作るもの

顎顔面口腔外科学分野 高木 律 男



今年3月末をもって定年退職となります。故郷の長野県飯田市から新潟に来て早くも47年が経過しました。この間、上越市の頸南病院に2年半、アメリカに半年、計3年間新潟市を離

れましたが、それ以外はずっと新潟市でした。当初、海のない長野県から来て、米や魚のおいしさに圧倒され、夏になり枝豆も加わり、さらに日本酒の美味さも加わり、完全に新潟人となりました。長い間お世話になった歯学部から離任するということで、学生時代からの思い出話を皆さんへのメッセージとしたいと思います。

学生時代にはサッカー部に所属していました。所属する予定ではありませんでした。全学の陸上部に所属しました。そんなある日、学年対抗のサッカー大会があり、サッカー部の大先輩の北林先輩がキーパーを務める4年生チーム（サッカー部の大木葉先輩や北村先輩も同じ学年）に、私が入れた1点で勝利しました。クラスが集まり祝勝会の会場にて、乾杯と同時に「入部おめでとう」ということで、サッカー部入部が決まりました。以後、練習と酒の日々が始まりました。

当時学部の2年目は授業時間に余裕がありました。サッカー部の友人・垣内さんが根っからの映画狂で、「面白くない映画を見ないと、面白い映画の良さは分からない」という言葉に感化され、年間248本を見ました。当時は二本立てや三本立ての映画館もあり、尻が痛くなるほど映画館に座っていたことも何日かありました。おかげで、B級映画、怖い映画などなど、広い映画館の中、

たった一人では見るに耐えられない映画も見ました。後に親族となった大杉漣さんと話が合うという、何が良い方向に向くかわからないと思い起こしています。

そんな生活の中でも、授業は朝から出ていました。それだけが勉強時間だったからですが、まさに良く遊び、よく？学びであったと思います。さらにこれらの遊びの中から、人と話をするのが好きになり、臨床実習以後、患者さんと世間話をしながらの治療が楽しみでした。

口腔外科に残るきっかけもサッカー部でした。後援会長の大橋靖教授との出会いは、私がマネージャーをしていた当時のことでした。厳格な先生で、たぶん誰も近寄りたがたい存在であったと思います。その第二口腔外科（現顎顔面口腔外科）には、サッカー部と一緒に汗を流した永山先輩、高橋先輩が在籍していました。気が付いたら第二口腔外科に入局していました。

そもそも口腔外科は学生の時にはほとんど実習できるわけでもないですし、覚える内容は多岐にわたり、卒後1年でそれを臨床に活かすことなどできるはずがありません。とにかく、叱られても、文句を言われても、経験することで成長します。1年目に先輩の傘の下でどれだけ叱られながら経験できるかが勝負です。2年目になって後輩ができると、後輩の前で叱られることはプライドが許さず、徐々に引っ込むようになります。しかし、1年目に1度でも経験していると、次の年の1年生とは異なります。幸い厳しくも優しい先輩に恵まれ、夏休みのお盆の時には「じゃ夏休み取るからよろしく」…気が付いたら、お盆の数日入院患者さんは少ないものの1年目に一人で管理をすることになりました。急患で歯肉癌の患者さんが紹介されて来てあたふたしたのを忘れません。入院患者さんの管理は、医療の本質に迫るものであり、数か月でも是非経験してほしいと思います。

ゴルフは卒後2年目に始めました。大橋先生が約1年間在外研究員として留学されていたこともあり、その間に同級生に誘われて始めたのですが、もともと自然が好きで、管理された綺麗な芝・グリーン、そして倶楽部ハウスなどのたたずまいに、何処かあこがれていたセレブの世界に入った気分になりました。以後、頸南病院時代、アメリカ留学中と2回に渡り入れ込んだ時期がありましたが、我流ゴルフで昼の飲酒が楽しみという不真面目ゴルファーでした。先代の大橋先生は、そのあたりを見直すようにと言うことで、ゴルフ部の顧問に押し付けてくださったのかと感じます。しかし、性格は変えられず、逆にゴルフ部は親睦会的になってしまったのではないのでしょうか。部員、特に大橋先生時代にゴルフ部を作り上げてきた先生方、石田コーチには申し訳なく思っています。それでも、重谷先生はじめ多くの先生方の協力のもと、ゴルフ部とともにゴルフを続けてこられたこと（健康であること）が一番の喜びです。結果がすべてではありませんが、競技ゴルフでは勝ち負けは大きく、歯学体（デンタル）でも優勝する選手が数名でも出たことは良き思いであり誇りでもあります。競技ゴルフをしていなかった私が最初で最後に歯学体のエキシビションに参加できると思った昨年、新潟大学歯学部ゴルフ部が主催予定であった歯学体がCOVID-19蔓延

で中止になってしまいました。

もう一つ大橋先生から引き継がせていただいたのが、口唇裂・口蓋裂の治療でした。大橋先生が1983年から取り入れたHotz床併用二段階口蓋形成法は、医局を挙げてずっと継続している研究で、臨床のみでなく、基礎研究としても多くの大学院生を生みだし、臨床に活かしてきています。今は、医歯学総合病院として、一つの口蓋裂診療チームとなり、形成外科や歯科矯正、言語治療室などとのチーム医療の輪を広げています。これとは別に、ミャンマーのヤンゴン大学歯学部と姉妹校となったことから、ここ数年は口蓋裂症例を中心とする医療支援を経験させてもらい、6年間で60症例の手術と現地での日常を通して、留学とは違うカルチャーショックを感じました。

「あるがままに」頑張ってきた大学生生活48年（教授生活22年を含む）でした。その他に留学のこと、仕事のことは同窓会誌にも書かせていただきました。いろいろと紙面を使わせていただき感謝です。今は皆様のおかげで、良く学び、良く遊び、良く仕事をしてきたと燃え尽きる寸前と感じています。

最後に、今後ますます新潟大学歯学部のご発展と関係各位学生諸君のご健康を祈念し、退職の言葉とさせていただきます。長年、お世話になりました。ありがとうございました。

## 退職に寄せて

口腔保健学分野 山崎和久

新潟大学に籍を置くようになってから早いもので40年が経ち、退職の時を迎えることになりました。退職前最後の年が新型コロナウイルス感染症の蔓延で、予定していた行事が中止や先送りになるなどの混乱は予想もしていませんでしたが、個人的には大過なく節目の時を迎えられることに感謝しております。一番の思い出は研究に係ることですので、それについて書かせていただきます。

私は神奈川歯科大学を1980年に卒業しました。在学中は、大学院に進むなど全く考えておらず、卒業したら開業医にしばらく勤めてから開業するのかなと漠然と思っていました。ところが、臨床実習もほぼ3分の2を終え夏休みにはいる直前、歯周病学の教授に呼び出され、新潟大学の原耕二教授が新潟出身者をリクルートしているので会っただけ会ってほしいと言われました。教授の頼みにNOと言えるはずもなく、生家のある十日町に帰るのに回り道をして、原先生のお部屋を訪ねたのが研究者としての道を選ぶことになる第1の転換点でした。

原先生は就任されて5年足らずの新進気鋭、やる気満々の教授で、歯周病学の重要性を熱く語る姿に引き寄せられ歯科保存学第2講座（当時）に残ることになってしまいました。同期入局者10名を含めても総勢20数名の医局でしたので、原先生が人探しをしていたのも納得した次第です。研究生から大学院に入学し、親からは大学院だけという約束で診療やアルバイトをしながらの研究生活が始まりました。古き良きアットホームな医局では同期や先輩先生に本当に恵まれ、多くのことを学ぶことができました。当時の仲間とは毎年温泉での忘年会で旧交を温めています（写真1）。

1980年代から90年代は歯周病学、歯周治療学が最も急激に発展した時期と言っても過言ではないと思います。red complex細菌の概念が発表され、次々とクローニングされた炎症性サイトカインや骨代謝関連遺伝子、明らかになった免疫細胞の表面マーカーなどをターゲットにして病因論研

究が隆盛しました。GTR法の基本概念が示されたのがこの時期です。学問の進歩を肌で感じながら知識を得、研究ができたことは大変幸運でした。

学位の研究は口腔生化学の野原廣美教授のご指導を受けました。野原先生のお人柄は、ご逝去された際に追悼文として同窓会誌に書かせていただいたので、詳細は割愛しますが、本当に素晴らしい先生でした。野原先生をはじめ生化学の先生方や原先生の薫陶を受け、早朝から深夜まで実験をするという大学院生らしい大学院生活を送り、無事に学位論文をまとめることができました。研究することの意義や楽しさ（もちろんつらいことも多々あった訳ですが）を学んだこの時期が第2の転換点でした。大学院終了後は付属病院の助手に採用され、診療、教育、研究の3足の草鞋を履き、日々奮闘していましたが、縁あってオーストラリアのクイーンズランド大学に留学する機会を得ることができました。

留学先のボスであったGregory. J. Seymour教授は歯周病の免疫病理学における若手の世界的研究者でしたが、研究者としてはもちろん、臨床家、教育者、家庭人としても素晴らしい方で、今でも家族ぐるみで付き合いのある彼との出会いがなければ、その後の人生はなかったと思っています（写真2）。自分自身の研究が海外でも知られるようになる前は、彼のラボでポスドクをしたことで、海外の学会にでかけた際に多くの知己を得ることができました。この留学が第3のそして最大の転換点でした。



写真1 忘年会  
2017年12月撮影

帰国後は新たな研究テーマとしてT細胞に焦点をあてて歯周病の免疫病因メカニズムの研究を始めました。今と違って研究費も潤沢にあった訳ではありませんでしたので、ピペットチップを洗って再利用するという、今の院生からは考えられないような状況でしたが、全く気にはなりません。一つの研究から新たな疑問とアイデアが浮かび、それが科研費の獲得と新たな研究につながるといういい循環が生まれました。T細胞研究から一つの認識抗原を同定しましたが、その分子が動脈硬化症に関与していることを知り、歯周病と全身の関連研究に発展していきました。

2004年に新設となった歯学部口腔生命福祉学科に異動しましたが、周囲の理解もあって変わらず研究をつづけることができました。外来患者さんの協力による臨床研究で関連に確証を得て、マウスを使った因果解明に取り掛かったのですが、それまで提唱されていたメカニズムとの矛盾に悩んでしまいました。たまたま腸内細菌の論文にたどり着き、口腸関連に注目しました。飲み込まれた歯周病原細菌が腸内細菌叢を変化させ、全身に悪影響を与えるのではという仮説の樹立に至りました。最初は解析を依頼した共同研究者も“ホンマかいな？”と半信半疑でしたが、2014年に発表し

た論文の反響は大きく、2020年12月現在で150を超える引用回数を誇り、新たな学問分野として認知されてきました。口腸関連研究で科学研究費の基盤Aを2回連続で採択されるという幸運にも恵まれ、研究は順調に進み、それまでの一連の成果が評価され、2016年にIADRからDistinguished Scientist Award (写真3)、2020年に日本歯科医学会会長賞を授与されました。

溢れ出る研究のアイデアを形にするため実験をしてデータを出してくれたのはこれまで指導してきた大学院生などです。彼らの頑張りなくしてここまでの成果はありませんでした。在職中に29名の学位研究の指導を行いました。そのほとんどが数々の賞を受賞し、特に5名はIADR Hatton Awardの日本代表に選ばれ、7名の留学をお世話しました。その人達がそれぞれの立場で活躍していることは私の誇りでもあります。

最後に、ここまで来られたのは、節目節目で素晴らしい人達に恵まれたということに尽きると思います。どんな時もサポートしてくれた両親・家族には感謝の言葉もありません。

これまでにお世話になった全ての方々に感謝しつつ、新潟大学歯学部の益々の発展を祈りながら筆を置かせていただきます。



写真2 留学時



写真3 IADR授賞式